

新刊紹介

佐藤寛著 『開発援助の社会学』

佐藤 寛



世界思想社、2005年

本書は平成一六年度アジア経済研究所の調査研究事業「開発社会学理論構築研究」の成果であり、同時に筆者の過去十数年にわたる「援助研究」の一つの到達点(あくまでも通過点だが)でもある。

本書は一部構成となっており、主な内容は以下の通りである。

第一部「開発援助を社会学的に見る」は四つの章からなる。第一章「社会が発展するとは」で社会の発展と経済・技術進歩との関係を考える。

第二章「近代化という呪文」では、今日の途上国における「開発」は、

多くの場合「西欧近代」を模倣することを目標にしていることを指摘する。そして一九六〇年代〜七〇年代に社会学では大きな議論を呼んだ「近代化論」、「従属論」、「内発的発展論」などと開発援助の関係について考える。

第三章「開発援助という行為と用語」では、本書における開発援助の概念を定義し、「贈与」の一形態としての援助について考えたい。第二次世界大戦後の開発援助の大きな歴史を振り返る。また、開発援助が植民地期のミッシヨナリーと多くの共通点を持っていることを指摘する。第四章「プロジェクトと社会」では、プロジェクトという社会的行為について整理した上で、援助プロジェクトの社会的影響について簡単に触れる。

第二部「開発援助の現場から」は、筆者がこれまでフィールド調査を行った世界各地のプロジェクト現場での出来事を手がかりに、援助現象を様々な角度から分析する。第五章、第六章「健康な生活(1)(2)」では、現在多くの途上国で取り組まれている基礎保健、母子保健、結核対策などのプロジェクトを例に挙げながら、同じ疾病対策であっても、対象社会のありように応じてプロジェクト介入の仕方が異なるべきことを指摘する。第七章「環境に働きかける」では、特に森林保全のためのプロジェクトを取り上げつつ、マクロな環境問題を考えて森林を保全したい国家

やドナー(援助者)と、生活の糧として森林を利用したい住民との利害の不一致とその調整方法について考える。

第八章「貧困削減と住民組織化」では近年開発援助の中心的課題となっている「貧困削減」が具体的にどのように取り組まれているのかを、特に貧困女性をターゲットにした「収入向上」プロジェクトと、そのための住民組織化を例に取りつつ考察する。第九章「住民参加のパラドクス」では、従来の「トップダウン」型開発の欠点を補う手法として注目を浴びている「参加型開発」は多くの可能性を秘めているが、ドナーの意図とは異なる「村人の戦略」が発揮されると、プロジェクトが歪められてしまう可能性があることを指摘する。第一〇章「民主化は援助か布教か」では、「民主化」という一見疑いのような開発目標も、実は西欧近代に固有の歴史経験に基づいた価値観であり、そうした歴史を共有しない途上国社会にとっては「価値観の押しつけ」とみなされうることを指摘する。第十一章「援助はえこひいき」では、外部者であるドナーによる途上国社会の理解(何が不正で何が正義か)と、当事者達の理解するその社会の姿は一致しない場合が多いことを踏まえ、途上国社会の「自主的」な開発努力をどのように支援できるのかという問題を考える。

第十二章「よそ者のパワー」では、ドナーと途上国の人々の間にある経

済的な格差ゆえに、意図せずともドナーが持つてしまう暴力的な「パワー」について考える。援助を適切に実施するためにはこのパワーを冷静に認識することが不可欠である。

このように書いてくると、筆者が開発援助という現象を批判的にのみ捉えているかのような印象を与えるかもしれない。しかし、筆者は「助ける」という行為の繰り返しこそが人類社会を豊かにしてきたと考えており、開発援助の意義を高く評価している。ただし、二〇世紀に人類史上初めて登場した「開発援助」という現象は、文化・価値観を異にするアクター間の相互行為であるがゆえに、「開発援助」をはさんで向かい合う「援助者」我々」と「被援助者」彼ら」の関係は、単なる「富者」と「貧者」、「強者」と「弱者」の関係で理解することはできず、そこには「善意」と「感謝」の応答以外の様々な感情も生起する。だからこそ開発援助は、人道主義に裏付けられた崇高な行為であったとしても、その動機は純粋さに安住することなく、その結果を冷静に見つめることが必要なのである。

「援助」という社会現象に関して生起する現実を丁寧に分析し、それを積み重ねるという作業によって「開発」という営為をより実り豊かなものにするのが「開発社会学」の使命ではないだろうか。

(さとう かん/アジア経済研究所開発研究センター)